

Title	日本の書物文化を世界に発信する
Sub Title	
Author	佐々木, 孝浩(Sasaki, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.7, No.1 (2020. 3) ,p.10- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 DMC研究センターシンポジウム第9回「大学教育のミライ： オープンエデュケーションのその先へ」これからのMOOCの話しよう 開催日時：2019年11月20日(水) 14:00～19:00 開催場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎2F大会議室 講演1 グローバルMOOCの経験から
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000007-0010

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

講演 1 グローバル MOOC の経験から
日本の書物文化を世界に発信する

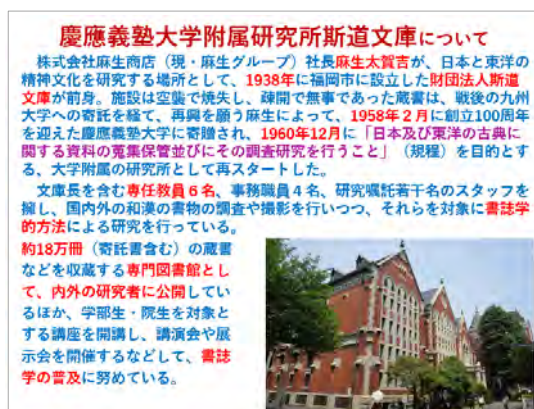
佐々木 孝浩

(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫・文庫長)

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、慶應義塾大学附属研究所、斯道文庫の文庫長をしております佐々木孝浩と申します。少々異質な人間が 1 人混じっている感じなのですが、お話しさせていただきたいと思います。



まず、ごく簡単に斯道文庫の説明をいたします。慶應義塾にございまして、漢字を使った国々の書物を研究する、日本国内でも大変珍しい研究所にございまして、専任教員が 6 名おります。漢字を使っていた国々の書物が約 18 万冊ございまして、書物研究を行っている所でございます。書誌学という学問を専門にする研究所なのですが、正直 10 年ぐらい前までは、もう滅びるのではないかという不安にございまして、本当に、古臭いと思われていた学問だったのです。デジタル技術の進展とともに書誌学という



学問が再びスポットを浴びてくるようになり、さらに最近の MOOC とうまい具合にいい関係を結べたことによって、何か全く新しい世界が広まったという感激にあふれている者として、お話しさせていただきたいと思います。

まず、先ほど大川先生からご案内がありました。慶應義塾が FutureLearn のパートナーになってコースを作らなければならないという話になりましたときに、日本で FutureLearn のパートナーになった最初の大学として、日本に関係するコースがよいだろうということになりました。慶應義塾の文学部をはじめとする日本の研究をしている先生方が何人か集められまして、松田先生を座長として会議が開かれたと記憶しております。2015 年のことでした。そのときに私も呼んでいただきまして、誰がやるかというような感じでしたが、私は、自分で手を挙げて「やります」と申し上げて、最初にやらせていただきました。これは一番檜に意味があるだろうと思ったからで、戦争ではないのですが、先駆けというのが



大事だろうと思ったからです。それは全く何の成算もないところからではなく、実はそれまでの経験で成算があったというのがあります。

その成算というのは、書誌学研究のために何度も海外に行っておりましたが、日本の書物というのは美術的価値がありますので、海外にも多く所蔵されております。それらを調査するために伺って見せていただいていたのですが、ただ自分だけが分かっているだけでは仕方がないので、持っている方にも理解していただきたい、一緒に学びたいという思いがありました。そういう方々にレクチャーのようなものが必要なのではないかと思っていたのです。また、インターネットの普及とデジタル技術の発展で、海外のいろいろな大学図書館が、自分の所にある古典籍を高精細画像で公開するということが流行になっておりまして、日本の古典籍などもたくさん公開されているのですが、それを本当に理解している人はやはり少ないというような問題などもありました。それで調査に伺った際に時間をつくって、調

査した先でレクチャーのようなことをさせていただいたりしていたのですが、その反応がとても良かったのです。それでこの内容をコースにすれば、結構いけるのではないかなというようなことを思っていたわけです。まず最初にプリンストン大学に押し掛

最初のコース公開まで

Futurelearnのパートナーとなって最初のプログラムは、やはり日本文化を紹介するコースがよいということになり、文学部の教員数名と研究所の教員2名が説明会に招集された。

コース内容に関してある程度の成算があったのと、いつか担当せざるを得ないならば、一番槍に意味があると考え立候補した。

「成算」とは：①書誌学研究の為に何度も海外出張をした経験から、欧米の美術館や大学の図書館などに、日本の古典籍が少なからず存在しており、それを理解したいと欲している研究者やライブラリアン・キュレーターが少なくないこと知っていた。②インターネットの普及とデジタル技術の発達に伴い、インターネットで日本古典籍の精彩カラー画像が公開されており、日本文化に興味のある人ならば、ネット環境さえあれば、そうした情報に容易に接することが可能な時代になっていることを感じていた。③海外での複数回のレクチャー経験があった。

けていき、知り合いに授業を1回分譲してもらい、3時間のレクチャーをしました。そこにライブラリアンの方が出ておられ、面白かったから我々の会でもやって欲しいということで、シカゴでやり、それからあちこちから声を掛けていただきました。そういうことがありましたので、本当にこの内容でいけば大丈夫だろうと思ったわけです。

2014年3月プリンストン大学押し売り講義

プリンストン大学に就職した若いアメリカの友人を頼り、同大学の和本を調査に行った際に、こちらからお願いして、友人の大学院の授業を1回分3時間をもらい、「和本入門」の講義を行う。東アジア図書館の中国書と日本書担当の研究ライブラリアンも出席。



2015年3月シカゴ美術館でワークショップ



プリンストンで出席していたライブラリアンが代表を務めるNCC（北米日本研究資料調整協議会）主催ワークショップで講師を務める。欧米の大学教員・ライブラリアン20名が参加。



2016年2月 カナダプリテッシュコロンビア大学 同3月 ハワイ大学マノア校でワークショップ

シカゴのワークショップ参加者から依頼を受け、ワークショップの講師を務める。

Futurelearnのコース公開後も、イエール大学・ケンブリッジ大学・南カルフォルニア大学・コロンビア大学・フランスギメ美術館・スミソニアン博物館群フリーア・サッカーギャラリーなどでワークショップを開催。



コース制作にあたって考えたことなのですが、和本の魅力が世界に通用するというのは、経験を通して確認済みであったので、本自体は斯道文庫や慶應義塾図書館、また個人の蔵書から、美しいものをできるだけたくさん選んで、画像を通して見ていただければ、その画像を見るだけでも楽しんでもらえるだろうということがまず一つ。次に、あまり内容のことに踏み込み過ぎると、専門的になって難しくなってしまうので、今、海外でも流行っているマテリアルカルチャーというか、物質に焦点を当てて、本という物に注目してもらうような作りにし、なおかつ併せて日本の文学や歴史、宗教などに興味のない人でも楽しめるような、日本の文化を何となく分かってもらえるよう

なコース作りをしようと考えました。しかしながら、説明はできるだけ単純なものとしつつも、ある程度の専門的な部分も含んで、知的好奇心をくすぐりながら楽しんでいただけるようにし、なおかつ人文科学の法則のようなものも提示できるような内容になることを、制作するにあたり心掛けました。

コース制作に当たって考えたこと

- ① 和本の魅力が世界で通用することは確認済みであるので、斯道文庫・慶應義塾図書館・個人の蔵書から、できるだけ良質なものを数多く用意し、ビデオや画像を多用して、眺めているだけでも楽しめるものにする。
- ② 書物の内容に踏み込むと、難しくなってしまうので、あくまでも書物の物質的な側面に注目して、日本の文学や歴史・宗教にあまり興味のない人でも楽しめるものにする。
- ③ 説明はできるだけ単純なものとしつつも、ある程度専門的な部分も含み込むようにし、人文科学の法則のようなものを提示できるように心がける。



ラッキーだったことに、まず先ほども申し上げましたが、本がとにかくたくさんあるので、これを自由に使えるということがあります。そして斯道文庫には6人も教員がおりますから、書物を専門とする同僚たちを巻き込むということことができました。そしてなんとと言っても、大川先生をはじめとするメンバーがいらっしゃらなかったら、とても出来上がらなかったことなので、本当に内容だけではどうにもならない部分をカバーしていただいて感謝しております。宮北さんにも大変にお世話になりました。また、慶應義塾大学出版会の安井さんによる強力なサポートがあり、本当にすごく総合力が必要だと思いました。そういうものが

MOOC のコースなのだということを実感しております。それからお恥ずかしい話ですが、日本のことをずっとやってまいりましたので、あまり語学が得意ではありませんが、やはり海外で公開するためには英語を基本にして発信する必要があるわけです。われわれの若干専門性のある日本語のテキストやビデオで話していることを、英訳していただく必要がありまして、それを誰にお願いすればいいのかと思っていたときに、旧知のジャン・ピエーロ・ペルシアーニさんという、現在イリノイ州立大学の先生をしておられる方ですが、ちょうど日本に滞在しておられて、この方に翻訳をお願いすることができました。知り合いの方からも「とてもいい英訳だ」とお褒めいただき、彼のおかげで

あると感謝しております。

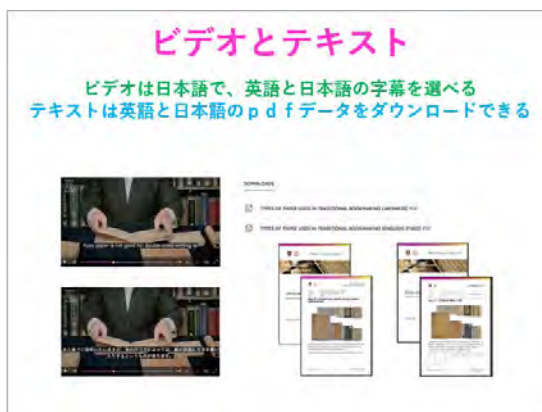
2016 年から開講することができまして、まず宣伝用のトレーラービデオが FutureLearn を通して配信されることになりました。これについては、さすがに「英語で話せ」と言われまして、後方でビデオが流れているのが本当に心苦しくて仕方がないのですが、拙い英語でお話しさせていただきました。しかも知らないうちに、許可は取られてないと思うのですが YouTube に流されたりして、「YouTuber になった」と知人に言われました。ただ、再生回数が少な過ぎてそれがまた心苦しいのですが・・・。



やはり飽きないように勉強をしてもらうのは大変大事なことで、コースの組み立てが Article、Video、Quiz、Discussion という 4 つの部分からなっているのですが、それぞれを大川先生の提案どおりに、組み立てをいろいろ考えてやりました。クイズを考えたり、ビデオとテキストの配分を考えたりするのが難しかったです。私は、本は静止画で見るとより動画で見たほうが立体感とか存在感を得られるので、できるだ



けビデオを多用しました。別に outdated ということではなくて、とにかく手元を映していただく形で、アップでいろいろな書物をめくったり巻いたりしまして、そういうところが非常に反応が良かったです。また、英語と日本語のテキストを pdf でダウンロードして、さらにビデオもダウンロードできますから、実はネットを使わなくても勉強できる環境が提供されているのです。実際、海外の知人の先生は、それをダウンロードして授業で使ってくださいました。

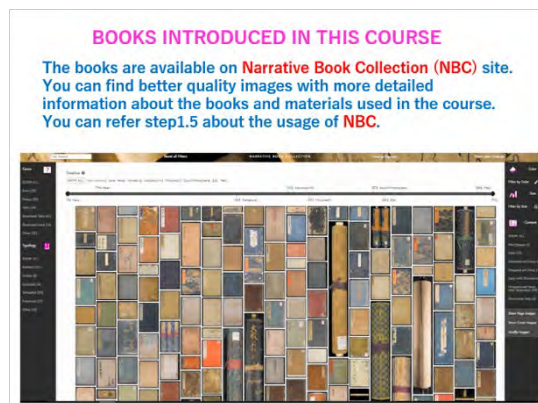


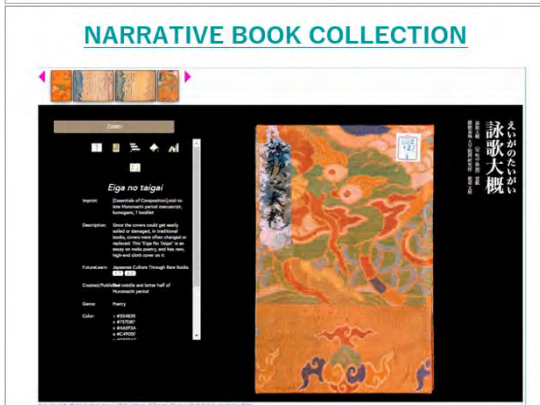
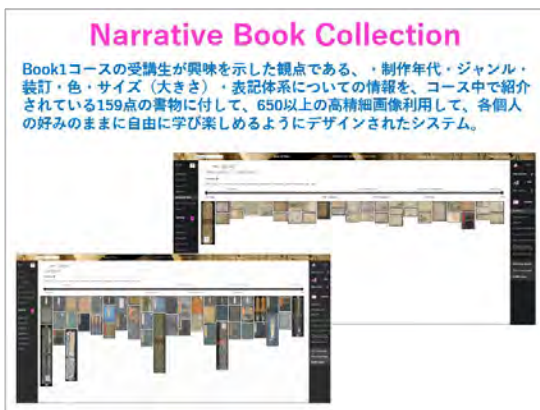
それから受講者にも参加を募るということで、特に私のやりましたのは書物のコースですから、「あなたの家にある最も古い本は何ですか」という、これも大川先生のサジェスチョンだったのですが、そういうこと

を聞きました。みなさん、うちにこんな本があると行って、それを写真に撮ってアップしてみんなで見せっこするようなサイトも作っていただいて、全世界から本当にすごい本がたくさん集まって盛り上がりました。



また、コースで扱っている書物をさらに拡大して、具体的に見ることができる NBC というものを宮北さんが開発してくださって、後ろでもデモンストレーションがありますが、年代、表紙の色、形態、内容によって順番を変えたり、自分の気に入ったものを取り出して見たり、自由に並べ替えをしたりできるようになりました。「この本をもっとクローズアップしてみたいな」と言うと、拡大されて大迫力の本になったりするわけです。また、ビデオも対話形式や出張撮





影などもあり、和本ですから神保町のお店に出掛けて店頭で撮影させていただいたり、最後の締めは和室で正座して日本らしさを出したりしました。ここは、慶應横浜初等部という小学校の茶室を借りて、そこまで出張して撮影いたしました。それから先ほども申し上げましたように、ビデオを多用してできるだけ物に語らせるということもいたしました。



登録者数は先ほど出ましたが、第6回目までのデータで、166カ国2万1477人の登録者を得て、国別でも、FutureLearnはどうしても本部のあるイギリスが強いというのがあります。結構いろいろな国々から参加がありました。



Book1 受講者の地域別割合と国別ランキング

リージョンごと（地域別）の登録者数		登録者数：上位20カ国		
リージョン	登録者数（人）	順位	国名	人数
ヨーロッパ	10,440 (48.6%)	1	イギリス	92
アジア	4,578 (21.3%)	2	アメリカ合衆国	13
北米	3,036 (17.3%)	3	日本	14
南米	949 (4.4%)	4	オーストラリア	—
アフリカ	828 (3.9%)	5	インド	15
オセアニア	508 (2.4%)	6	イタリア	18
中東	342 (1.6%)	7	スペイン	17
		8	フランス	16
		9	カナダ	19
		10	ドイツ	20

それなりに多くの方に登録していただいて評判も良かったので、当初からの計画でもあったのですが、兄弟のコースというこ

とで斯道文庫の中国系の書物を専門にして
いる人たちに加わっていただいて、二つ目
のコースを作りました。さらにもう一つと



いうことで和紙の研究をしている後輩を巻
き込みまして、和紙に関するコースも作り
ました。こちらも日本橋にある和紙問屋さ
んに出掛けたり、埼玉県紙透工房で撮影
したりいたしました。ただ本に比べると一



般性が薄いところもありまして、受講者数

は最初のコースよりは少ないです。それで



Book2 受講者の地域別割合と国別ランキング

リージョンごと (地域別) の登録者数	登録者数: 上位20カ国		
リージョン	登録者数 (%)	順位	国名
ヨーロッパ	1,620 (53.8%)	1	イギリス
北米	565 (18.8%)	2	アメリカ
アジア	432 (14.3%)	3	日本
オーストラリア	171 (5.7%)	4	オーストラリア
南米	112 (3.7%)	5	オランダ
中東	92 (3.1%)	6	イタリア
アフリカ	49 (1.6%)	7	フランス
		8	スペイン
		9	ドイツ
		10	ポルトガル
		11	ギリシャ
		12	中国
		13	インドネシア
		14	韓国
		15	インド
		16	タイ
		17	フィリピン
		18	ニュージーランド
		19	台湾
		20	スイス

も、結構熱心な登録者さんが参加してくだ
さり、それなりに盛り上がっているところ
でございます。書物に関する三つのコース
の実績ですが、このようになっております。

書物に関する3コースの実績

Book1: Japanese Culture Through Rare Books
6回公開 21,455人 20,525コメント 165カ国

Book2: Sino-Japanese Interactions Through Rare Books
3回公開 5,789人 5,441コメント 130カ国

Book3: The Art of Washi Paper in Japanese Rare Books
2回公開 2,982人 7,531コメント 106カ国

Course	Run	Date	Japanese	Leavers	Leavers	Countries	Comments	Certificates/Upgrades	Total Countries	
Book1 Japanese Culture Through Rare Books	2016	Run1	8,660	3,951	315	140	8,049	53	165	
		Run2	5,077	2,584	427	130	5,905	23		
	2017	Run3	2,226	1,355	245	112	2,172	35		
		Run4	5,550	1,100	250	87	4,454	25		
		Run5	28 May 2018	1,630	969	189	105	1,737		25
Book2 Sino-Japanese Interactions Through Rare Books	2019	Run6	1,376	563	126	92	1,107	23	130	
	2017	Run1	4,118	1,750	610	126	3,843	84		
		Run2	28 Feb 2018	923	626	111	76	723		16
	2018	Run3	18 Feb 2019	748	400	59	77	676		10
Book3 The Art of Washi Paper in Japanese Rare Books	2018	Run1	1,934	1,189	167	90	3,477	56	106	
	2019	Run2	1,048	692	63	74	1,072	19		
TOTAL			30,220	15,038	2,765	1,120	30,512	300	190	

今回のテーマである今後のことに関して、
最後に時間かけてお話ししたいのですが、
コースを開発した私の感想ですが、これは
結構いけるだろうという予想が当たり、ほ

ったのですが、やはりマーケティングとまではいきませんが、実体験、事前調査を基にして構想する大切さをあらためて感じました。

それから私の立場からすると、日本の伝統文化とその産物は、日本の貴重な資源であることを再認識することができて、それを守りながら効率よく活用していくことの必要性を痛感しています。やはり日本の古典研究はどんどん尻すぼみになっていますので、物を使うことによって、もう一度盛り上げたいという気持ちがあります。それから日本文化を直接対象としなくても、日本の書物のデザインやコンセプトはさまざまな場面で応用可能なものだろうと思っています。

また、コース終了部分のコメントに世界中から感謝の言葉が寄せられました。

「Thank you, professor Sasaki」というのが、最初のコースが終わったときに、一体、何件、書き込みがあっただろうと。私、生きてきてこんなに人から感謝されたことはないと、非常に幸せを感じまして、やってよかったと思いました。本当に仕事のやりがいを感じたというのが正直なところです。

それからチームでなければできないことがあると。よく映画の封切りのときに出演していた俳優が、チームでできて感謝しますというようなこと言っていますが、あれは心底、心から思っているのだなと

いうのが実感できました。本当にいいチームワークがないと、いいものはできないということを痛感しているところです。

それから FutureLearn の特色は、他もそうかもしれませんが、コメントを受講者が自由に書き込むことで、お互いに学んだり、私たちが返事をしたりすることができる期間を設定しています。最初のときは 8000 ぐらいコメントがあって、全て英語なので読むのが大変で、とても全部にはお答えができなかったのですが、それを読んでいくと、本当に日本人が全然思いつかないような意見や質問が寄せられていて、異文化交流というのは大事なのだなというのが、実感できました。特にこういうことは、これからの日本人にとって必要な経験なのではないかと思っています。

コース公開後の感想

- ・予想が当たったことにほっとすると共に、**実体験（事前調査）**を基にして**構想する大切さ**を改めて感じた。
- ・日本の**伝統文化とその産物は、日本の貴重な資源**であることを再認識すると共に、**それを守りながら効率良く活用していくことの必要性**を痛感した。（日本文化を直接対象としなくても、デザインやコンセプトは様々な場面で応用可能なはずである。）
- ・コース終了部分のコメントに世界中から感謝の言葉が寄せられて感激した。これが本当の**仕事のやり甲斐**なんだと感じた。
- ・チームでなければできないことがあることを再認識し、**チームワークというものの大切さ**を改めて実感した。
- ・想定していない角度からの質問が多数寄せられ、**異文化交流**というものを**実感**した。日本人には特に必要な経験であろう。
- ・制作・公開を通じて成長できた**実感**。**挑戦することの大切さ**。
- ・日本はまだ**世界に対するアピールが足りない**し、その方法の検討も不十分である。自覚と自信を持って、正しい模索をすれば、必ず世界で活躍できるはずである。
- ・それにつけても必要なのは、情報伝達ツールとしての**英語の能力**である。

そして、MOOC に対する感想なのですが、やはり MOOC によって世界の学びの在り方が大きく変化していることを痛感したというのがあります。ネット環境と英語能力さえあれば、無料で何でも勉強できる時代が既に登場していますし、無料であるのです

から、質が保証されるわけでもありませんので、吟味する能力も必要になっていると感じました。それから嗜好や趣味を同じくする者同士を、世界規模で結び付ける場であり、SNS や YouTube など活用して、お互いに紹介し合ったりするような情報交換や知識共有を可能にする場になっている、というのも大変大きな意味だろうと思います。そして、様々なレベルでの異文化交流と異文化理解を推進する役目を果たしていることになりまして、また、こういうことを通じて新しい文化や芸術、学問が生まれる可能性すら秘めているのではないかと、実際に本気で思っています。世界がより良く変わっていくきっかけの場になってほしいとも思っています。私は MOOC の制作に関係して、

Mooocに対する感想

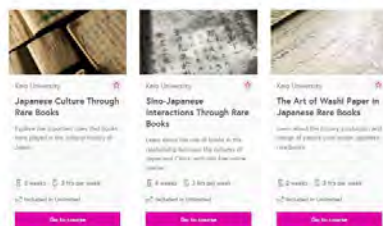

- 世界の学びのあり方が大きく変化していることを認識。ネット環境と英語能力さえあれば、**無料であらゆることを勉強できる時代**になっている。
- 無料であるものは、それ故に質が必ずしも保証されている訳ではないので、**吟味する能力も必要**となってくるであろう。
- 嗜好や興味を同じくするもの同士を世界規模で結びつける場であり(**SNSやYouTube等が活躍**)、**有用な情報の交換や共有を可能にする場**ともなりうる。
- 様々なレベルでの異文化交流と異文化理解を推進する役目を果たしている。
- **新しい文化や芸術、学問などが生まれる可能性を秘めている。**
- **世界がより良く変わっていく切っ掛けを生む場であるのかもしれない(そうなることを望みたい)。**

先ほど「人生が変わった」と言いましたら、「何を大げさな」と笑われたのですが、本当にすごく恩恵を被っています。世界中のいろいろな学会などに出掛けますが、たいがい受講者の方がいて挨拶して下さいます。「うちにも来てくれる？」と言っていただいで、最近もあちこちに呼んでいただいで


います。やったことがプラスでしかない、プラスばかりの状態です。最近も、新しいコースを作成中ですが、ぜひ多くの大学でコースをたくさん作っていただいて、MOOC 効果というようなものを実感していただきたいと思います。

次回のRerunの予定

Book1 - Run7: 2019年11月4日～11月24日
Book2 - Run4: 2019年12月2日～12月29日
Book3 - Run3: 2020年1月13日～1月26日

Thank you very much.



少々急ぎ足でしたが、これで終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。